

先天性心疾患患児の栄養と体重増加

(分担研究：新生児養に関する研究)

研究協力者 南部 春生
共同研究者 太田八千雄 沢田 博行 服部 哲夫
坂井多恵子 佐々木真樹

要約：先天性心疾患を有し、心不全(+)orチアノーゼ(+)であった症例は、生後1ヶ月の体重増加が不良で、母乳栄養児の頻度も低かった。心不全の持続した症例では、3ヶ月以降、体重増加が有意に不良となる傾向がみとめられた。

見出し語：先天性心疾患 心不全 体重推移

研究方法・対象：平成1年1月1日～2年12月31日に出生し、心臓外来を受診した先天性心疾患患児を心不全・チアノーゼの有無により分類し、体重増加について検討した。心臓外来受診者は175名で、先天性心疾患のみとめられた患児は90名(51%)で、生後1ヶ月以内に死亡または手術を施行した13名をのぞき、外来経過観察の可能であった77名について検討した。

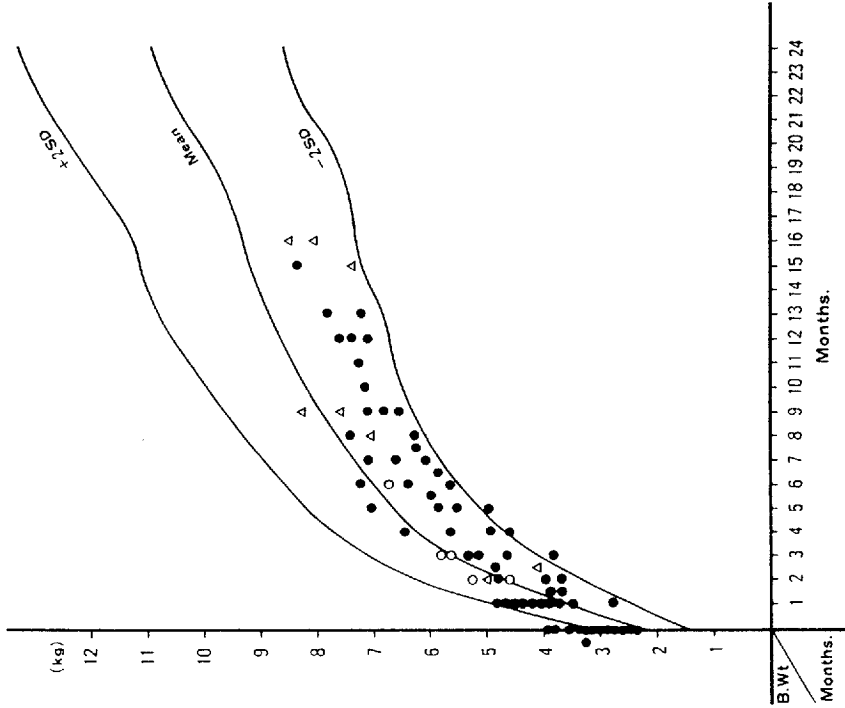
結果：77名中、心不全(-)・チアノーゼ(-)群は48名で、心不全(+)またはチアノーゼ(+)群29名であった。

表1にしめすごとく、在胎週数・出生時体重に有意差はなく、母乳栄養は58%、34%と重症心疾患ほど低い傾向がみとめられた。ミルクは全例普通乳で、低Na乳などを使用した症例はいなかった。生後1ヶ月の体重増加は $1044 \pm 237\text{g}$ 、 $618 \pm 297\text{g}$ と有意差がみとめられた。心胸廓比

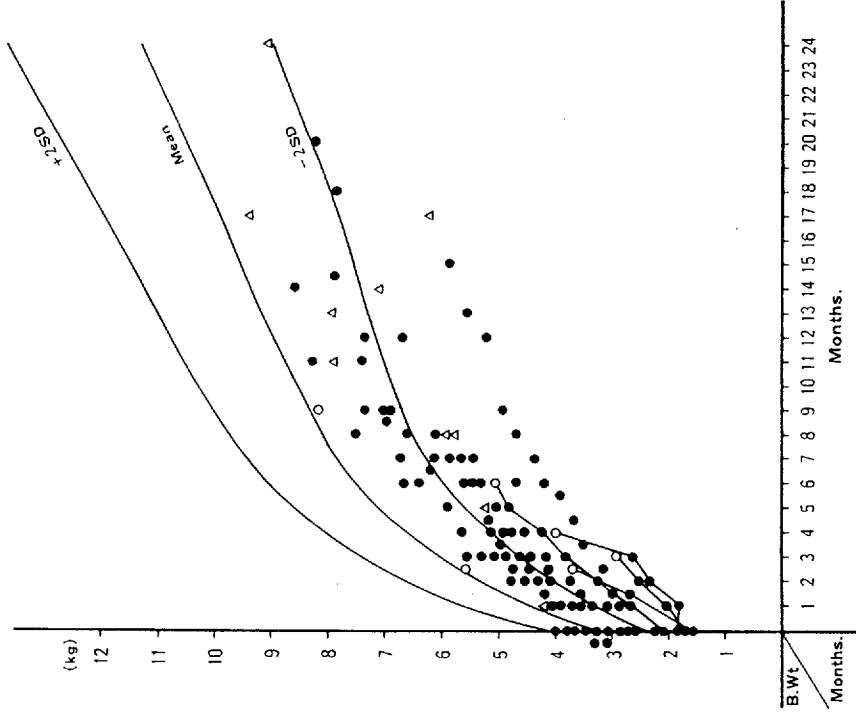
はそれぞれ $53 \pm 1.2\%$ 、 $58 \pm 3.6\%$ であった。心不全(+)orチアノーゼ(+)群を男女別に検討した(図1)。男児13名は出生時、全例平均以上であったが、心不全の持続した症例では3ヶ月以降平均以下になる傾向がみとめられた。女児16名中2500g以下の5名は、4名が心不全軽快し良好な体重増加をしめした。経過観察中の10名は平均 -1.8SD で、有意な体重増加不良がみとめられた。男女共、心不全が軽快し治療を中止した症例は、2500g以下の4名をのぞいて平均体重に分布していた。

まとめ・考察：重症先天性心疾患患児では母乳栄養が少なく体重増加も不良であった。生後3～4ヶ月から発育不良が顕著になる傾向がみとめられ、肺血管抵抗の低下による心不全増悪が1つの要因として考えられた。

心不全(+) or 子アノ一ゼ(+) 群の体重増加
男児13例
(経過中5例が心不全軽快)



心不全(+) or 子アノ一ゼ(+) 群の体重増加
女児16例
(経過中6例が心不全軽快)



心不全(-), チアノーゼ(-) 群と心不全(+) or チアノーゼ(+) 群との比較

	在胎週数	出生時体重	母乳・ミルク・混合栄養・チューブ栄養	生後1ヶ月時の体重増加	CTR
心不全 (-) チアノーゼ(-) 48名	30~41 W (38.4 ± 1.7)	1500~4270 g (3046 ± 453)	28・8・12 (母乳栄養児は58%)	1044 ± 237 g*	51—55% (53 ± 1.2)
心不全 (+) or チアノーゼ(+) 29名	34~41 W (38.6 ± 1.9)	1820~3760 g (2943 ± 580)	10・10・7・2 ⁽¹⁾ (母乳栄養児は34%)	618 ± 297 g*	48—70% (58 ± 3.6)

(1) 口唇口蓋裂のためチューブ栄養を行なったVSDcPH, severe-TOFの2名
*有意差有り

表1



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:先天性心疾患を有し、心不全(+)or チアノーゼ(+)であった症例は、生後1ヶ月の体重増加が不良で、母乳栄養児の頻度も低かった。心不全の持続した症例では、3ヶ月以降、体重増加が有意に不良となる傾向がみとめられた。